

那珂66

—那珂遺跡群第133次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1193集

2013

福岡市教育委員会

序

大陸をはじめとして、さまざまな地域との文化交流により発展を遂げてきた福岡市には、長い年月の中で築きあげられてきた数多くの歴史的遺産があります。それらを保護し、後世へと伝えていくことはわれわれの義務であります。

しかし、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な文化財が失われていることも事実です。本市では開発によりやむを得ず破壊されていく遺跡の記録保存を行い、広く公開するよう努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い平成23年度に調査を実施した那珂遺跡群第133次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、弥生時代・古墳時代および中世～近世の遺構が確認され、特に古墳時代の井戸からは、井戸を廃棄する際に一緒に埋められたと考えられる土器がまとまって出土しました。

今後、本書が文化財保護への理解を深める一助となるとともに、学術研究の資料としても活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、多大なご理解とご協力を賜りました関係者の方々に、心から謝意を表します。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

例言

1. 本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市博多区東光寺町1丁目319、321、322、323番地内において平成23年度に発掘調査を実施した那珂遺跡群第133次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託・国庫補助事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構および遺物実測図の作成、写真撮影、挿図の製図は藏富士・福蔵が行った。
5. 本書で用いた方位は、すべて磁北を示す。国土座標値は、世界測地系によるものである。
6. 遺構の呼称は、井戸をSE、土坑をSK、溝をSDと略号化した。
7. 遺物の番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
8. 本書に関する記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
9. 本書の執筆および編集は、福蔵が行った。

遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	133次	調査略号	NAK-133
調査番号	1114	分布地図図幅名	東光寺037	遺跡登録番号	020085
申請地面積	1,482.53m ²	調査対象面積	602.4 m ²	調査面積	540 m ²
調査地	福岡市博多区東光寺町1丁目319,321,322,323番	事前審査番号	22-2-1157		
調査期間	平成23(2011)年7月5日～9月20日				

本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	
1. 概要	4
2. 遺構と遺物	5
1) 井戸 (SE)	
2) 土坑 (SK)	
3) 溝 (SD)	
3. 結語	12

挿図目次

第1図 那珂遺跡群と周辺遺跡	2	第7図 SE011出土遺物実測図①	7
第2図 那珂遺跡群調査区位置図	3	第8図 SE011出土遺物実測図②	8
第3図 第133次調査区位置図	3	第9図 SE011出土遺物実測図③	9
第4図 遺構配置図	4	第10図 SK008・009実測図 および出土遺物実測図	11
第5図 SE010実測図 および出土遺物実測図	5	第11図 SD土層断面実測図 およびSD・SK出土遺物実測図	12
第6図 SE011実測図	6		

図版目次

図版1	1. I区調査区全景（南から） 2. II区調査区全景（西から） 3. III区調査区全景（南から）	図版3	1. SE011 土層断面（東から） 2. SE011 上面半截状況（東から） 3. SE011 上層土器出土状況（東から） 4・5・6. SE011 下層土器出土状況（東から）
図版2	1. SK008 土層断面（西から） 2. SK008 完掘状況（西から） 3. SK009 土層断面（西から） 4. SK009 完掘状況（西から） 5. SD006 土層断面（南から） 6. SD006 完掘状況（東から）	図版4	1. SE011 出土遺物（上層） 2. SE011 出土遺物（下層）

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成 23 年 3 月 23 日付けで、福岡市教育委員会に対し、個人事業者より、福岡市博多区東光寺町 1 丁目 319,321,322,323 番における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が提出された（事前審査番号：22-2-1157）。

これを受けて教育委員会文化財部埋蔵文化財第 1 課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることから、同年 5 月 10 日に確認調査を実施し、建設予定地の地表下約 40 cm においてピット等を確認した。この試掘成果をもとに両者で協議を行った結果、共同住宅建設部分については基礎工事が埋蔵文化財への影響を回避できないことから、建物建築面積 602.4 m² を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。

その後、同年 6 月 24 日に福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 7 月 5 日より発掘調査を、平成 24 年度に整理・報告書作成を行うこととなった。

発掘調査から報告書作成に至るまで、関係者各位には多大なご協力とご理解を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

2. 調査の組織（平成 23 年度）

主 体：福岡市教育委員会

總 括：埋蔵文化財第 2 課長 田中壽夫

同課調査第 2 係長 菅波正人

庶 務：埋蔵文化財第 1 課管理係 古賀とも子

事前審査：埋蔵文化財第 1 課事前審査係長 宮井善朗

同課事前審査係主任文化財主事 加藤良彦

同課事前審査係文化財主事 木下博文

調査担当：埋蔵文化財第 2 課調査第 1 係 藏富士寛

埋蔵文化財第 2 課調査第 2 係 福薗美由紀

整理・報告書作成（平成 24 年度）

主 体：福岡市教育委員会

總 括：経済観光文化局埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

同課調査第 2 係長 菅波正人

庶 務：埋蔵文化財審査課管理係 古賀とも子

整理担当：文化財保護課運用係 藏富士寛

埋蔵文化財調査課第 2 係 福薗美由紀

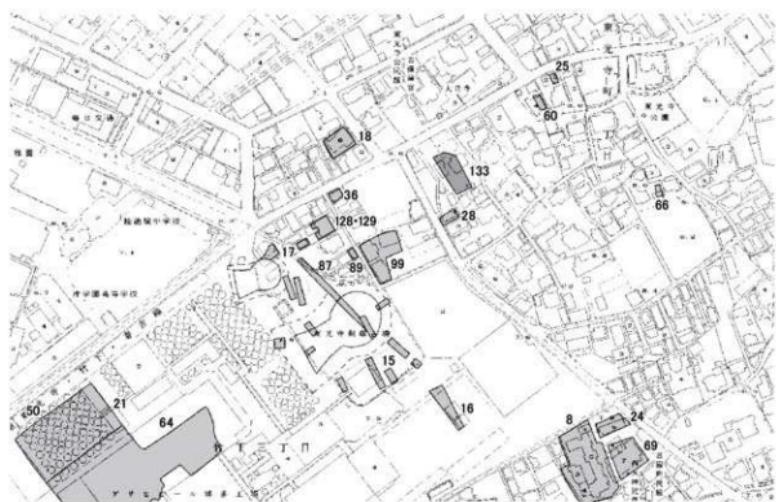
II. 遺跡の立地と環境

福岡市には、西から今宿、早良、福岡、糟屋平野が広がっている。那珂遺跡群は沖積平野である福岡平野にあり、那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地である春日丘陵の中位段丘北端部上に位置する。この丘陵は花崗岩風化層を基盤層とし、阿蘇火砕流である八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積している。遺跡の範囲は南北約1.6km、東西0.8kmと推定され、現在の標高は7.5～11mを測る。北側に隣接する比恵遺跡群とは、一連の丘陵状の遺跡群を構成すると考えられているが、便宜的に北側を比恵遺跡群、南側を那珂遺跡群と呼び分けている。南側には浅い鞍部を挟んで細長い台地が続いており、弥生時代前期に始まる五十川遺跡が位置している。また、周辺の台地上には、麦野遺跡群、井尻B遺跡、諸岡A・B遺跡、高畠遺跡、板付遺跡があり、弥生時代前期から断続的に集落や墓地が展開する状況を示している。さらに、台地周辺の低地では水田が営まれていたと考えられ、板付遺跡、那珂君林遺跡、東比恵3丁目遺跡などで水田跡が検出されている。

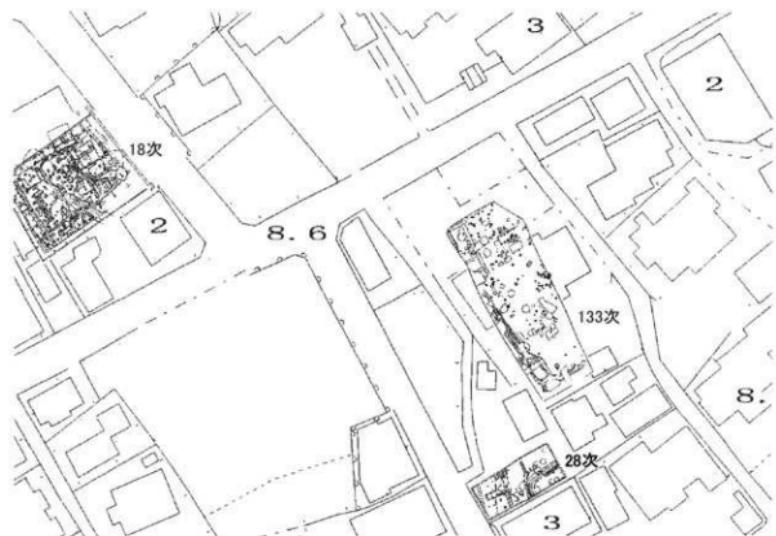
那珂遺跡群では、これまで141次の調査が行われ、旧石器時代から中近世に至るまでの遺構・遺物が確認されている。特に、弥生時代中期以降は奴国や那珂郡の中心的役割を担う地城として栄えたと見られ、各時代の重要な遺構や遺物が多く検出されている。中世以降は一般的な集落に変化していくが、中世後期の室町時代から戦国時代にかけては、各所に大きな溝が掘り巡らされており、大内氏や大友氏家臣団の知行地との関連が指摘されている。



第1図 那珂遺跡群と周辺遺跡 (1 / 25,000)



第2図 那珂遺跡群 調査区位置図 (1 / 4,000)



第3図 第133次調査区位置図 (1 / 1,000)

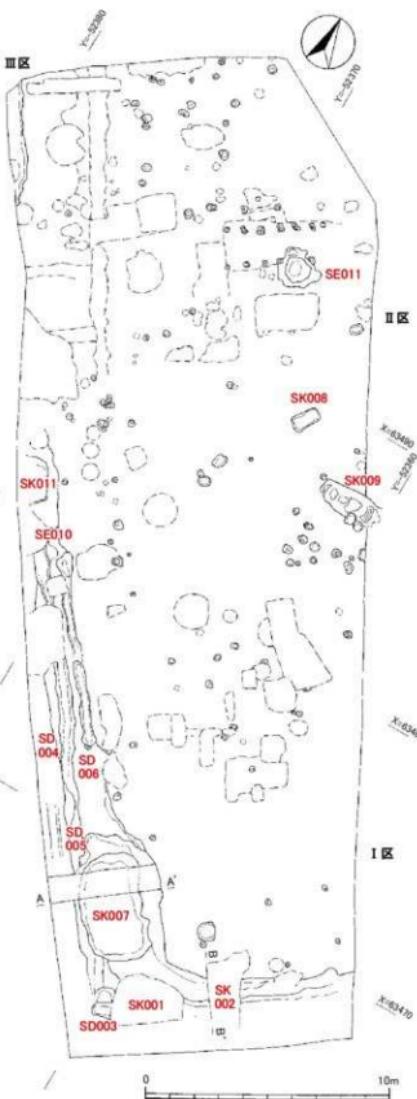
III. 調査の記録

1. 概要

今回報告する那珂遺跡群第133次調査区は、博多区東光寺町1丁目319,321,322,323番に所在し、同遺跡群の北端、比恵遺跡群との境界に近い場所に位置する。標高は7m前後を測る。調査前は宅地であった。これまでに、本調査区の南西側では28次調査、西側では東光寺剣塚古墳の調査や99次調査、北西側では18次調査が実施されている。

遺跡の層序は、ガラ入りの表土の直下で鳥栖ローム層となる。調査区東側では表土下40cmで、西側では表土下140cmで黄褐色の鳥栖ローム層を検出した。遺構はこの上面で検出した。西側の鳥栖ローム層は、ほぼ八女粘土層に近い下部ローム層であることから、ローム層は大きく削平されているものと思われる。

発掘調査は、平成23(2011)年7月5日に着手した。廃土置き場の関係から、調査区をI～III区にわけて調査を実施した。まず、I区(南側)の表土剥ぎを重機で行い、遺構精査、遺構掘削後、実測、周辺測量、高所作業車による写真撮影等、記録保存作業を行った。8月18・19日にI区の埋め戻しおよびII区(北側)の表土剥ぎを行った。II区もI区同様に調査を行い、9月9日にII区の埋め戻しとIII区(北西側)の表土剥ぎを実施した。III区の調査終了後、9月20日に発掘器材等を撤収し、すべての調査を完了した。



第4図 遺構配置図(1/200)

2. 遺構と遺物

今回の調査では、井戸、土坑および溝を検出した。以下、遺構種別毎に報告を行う。

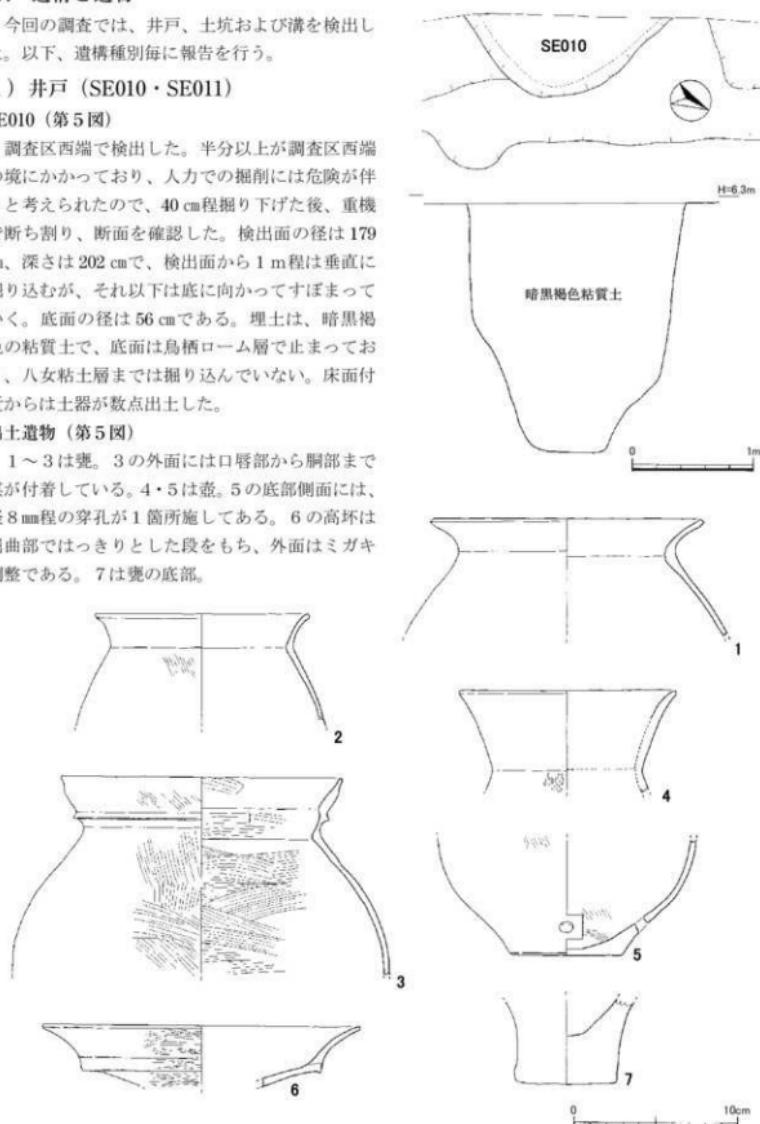
1) 井戸 (SE010・SE011)

SE010 (第5図)

調査区西端で検出した。半分以上が調査区西端の境にかかるており、人力での掘削には危険が伴うと考えられたので、40 cm程掘り下げた後、重機で断ち割り、断面を確認した。検出面の径は179 cm、深さは202 cmで、検出面から1 m程は垂直に掘り込むが、それ以下は底に向かってすぼまっていく。底面の径は56 cmである。埋土は、暗黒褐色粘質土で、底面は鳥栖ローム層で止まっており、八女粘土層までは掘り込んでいない。床面付近からは土器が数点出土した。

出土遺物 (第5図)

1～3は甕。3の外面には口唇部から胴部まで煤が付着している。4・5は壺。5の底部側面には、径8 mm程の穿孔が1箇所施してある。6の高环は屈曲部ではっきりとした段をもち、外面はミガキ調整である。7は甕の底部。



第5図 SE010 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

SE011 (第6図)

調査区東側で検出した。平面形は不整形な円形を呈し、径は約1.6m。壁はほぼ直に掘り込む。検出面から床面までの深さは2.5m（標高3.6m）である。埋土は暗黒褐色の粘質土で、床面に近くなるほど粘性が強くなる。検出面から130cm程掘り下げたところから湧水始めた。底面は八女粘土層を掘り抜いている。

検出面から約130cm下（上層）、約200m下（下層）で完形の土器がまとまって出土した。第6図中では、下層の出土土器を赤色で表している。これらの出土遺物から、この遺構は古墳時代前期のものと考えられる。

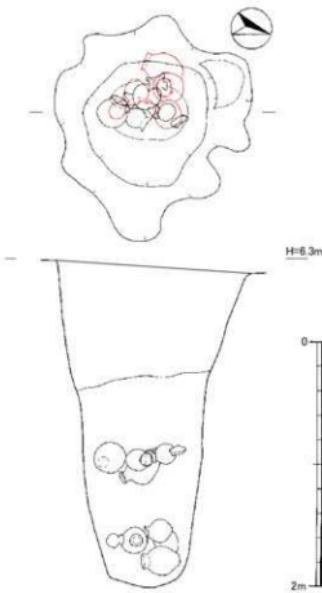
以下、遺物が出土した遺構検出面からの深さを-（マイナス）の記号を使って表す。

出土遺物（第7～9図）

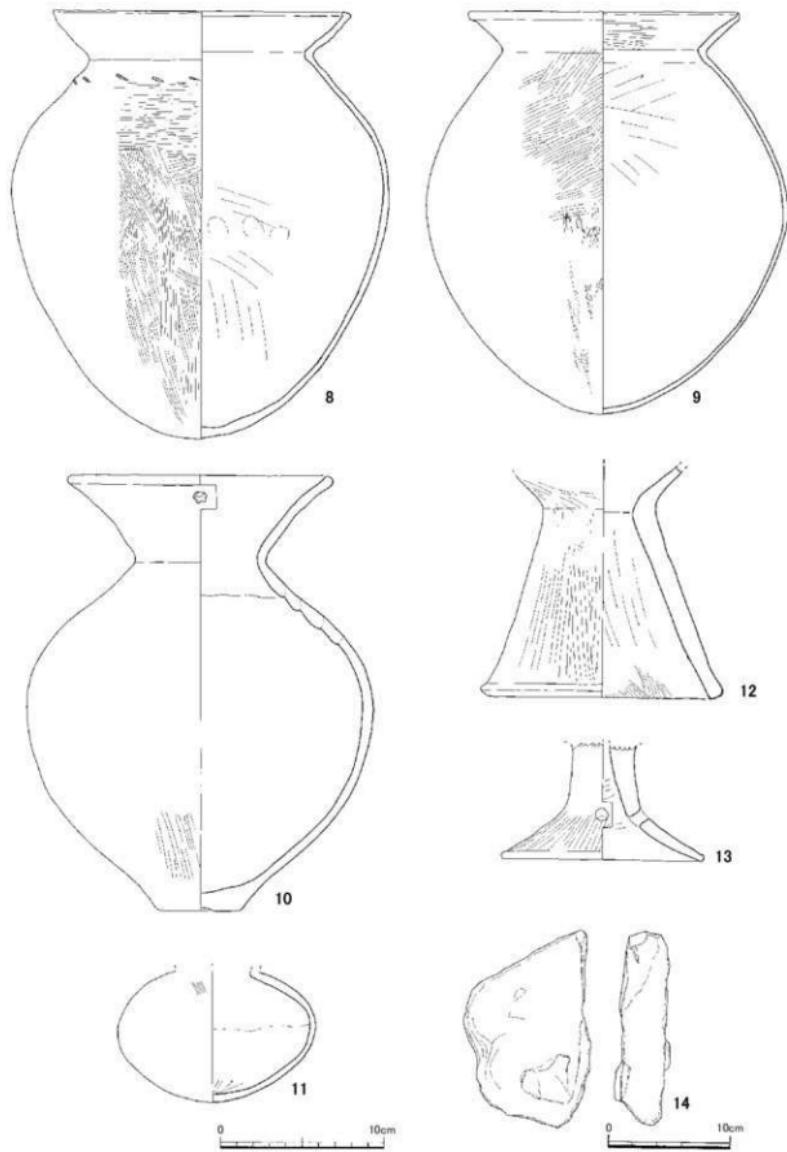
8～14（第7図）は、-130cmからまとめて出土した。8・9の甕の胴部内面はヘラ削り、外側は細かい刷毛目調整を施す。8の肩部には、ヘラ状の工具の刺突による文様が刻まれている。肩部から底部にかけて煤が付着している。9の胴部にも帶状に煤が付着している。10の壺は口縁部上部に一箇所穿孔が施されており、肩部内面には粘土の積み目が確認できる。11は小型丸底壺である。全体的に摩耗が激しい。12は器台である。13の高杯の脚部には穿孔が3箇所施されている。14の砥石は、一部に砥面が残存しているものの、ほとんどの部分が欠損している。

15～19（第8図）は、-200cmからまとめて出土した。15・16の甕は内外面ともが煤で覆われている。15の肩部には6条の波状の沈線が施される。口唇部は平らにつくり、端部を外面に摘み出す。16の胴部下には、粘土を帶状に貼り付け、指で押された跡が確認できる。被熱による破裂等で胴部下半分はひずみが激しい。17の壺には胴部中程に1箇所焼成後穿孔が施されている。外面は全面丁寧なミガキである。18の壺は頸部から直に立ち上がる口縁部を持つ。口縁部、胴部の一部に煤が付着している。底部にタキ痕が見られる。19は小型丸底壺。外面に細かい刷毛目調整、ミガキが見られる。厚手のつくりである。

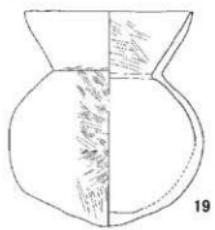
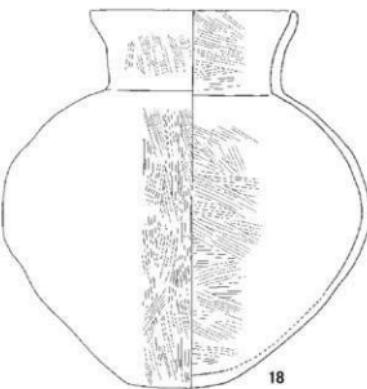
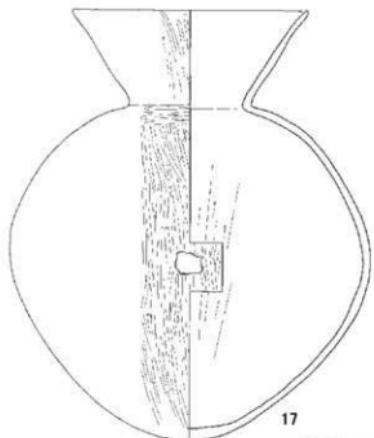
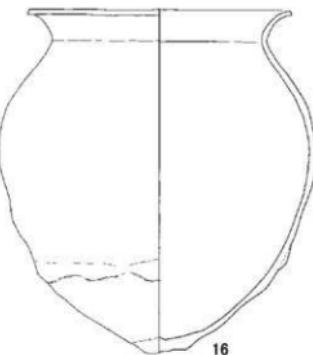
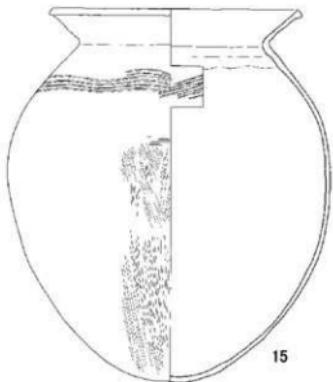
20～31（第9図）は、SE011内から出土したその他の遺物である。20の甕（-70、-90cm）は、胴部上半に波状の沈線が1条施される。21の壺は、-70、-90、-130、-140cmから破片が出土し、接合した。肩部の一部には、沈線で模様が描かれている。22は山陰系の大型の壺である。遺構上面で出土した。24は高杯の杯部である。遺構上面で検出した。25は山陰系の鼓形器台（-130cm）、26は小型器台である。遺構上面で検出した。27は丹塗りの小型壺（-70cm）、28は杏形器台（-130cm）



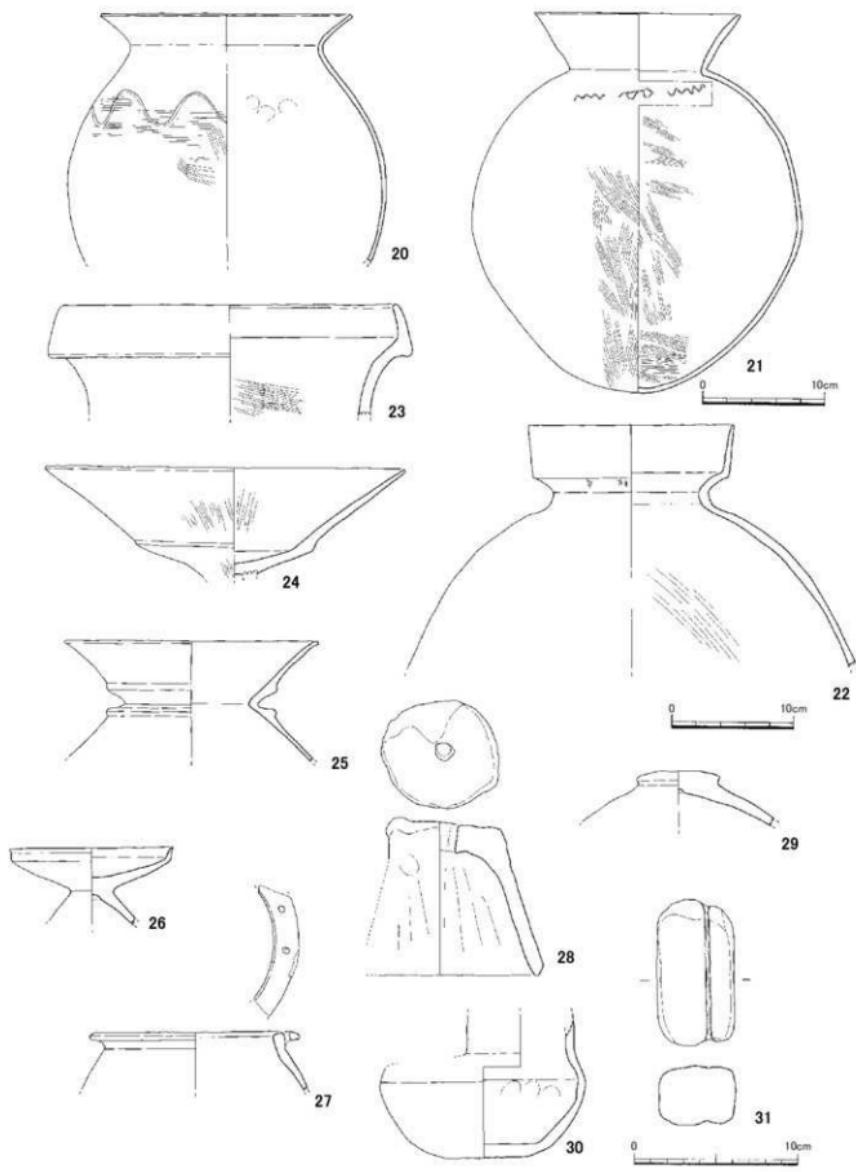
第6図 SE011 実測図（1 / 40）



第7図 SE011出土遺物実測図① (1/3, 1/4)



第8図 SE011出土遺物実測図② (1 / 3)



第9図 SE011出土遺物実測図③ (1/3, 1/4)

である。上面はやや斜めで片側が少し突出する。29は蓋（-70cm）である。30の土師器（-130cm）は、扁平な体部の片側に頸部が付く形で、復元すると平瓶のような形になると考えられる。外面はにぶい黄緑、内面は橙色を呈する。胎土には、径1~2mm程度の白色粒が多く含まれる。外面はナデ調整で、内面はケズリ、指おさえで仕上げており、底部と胴部、胴部と頸部の部分に粘土の接合痕が確認できる。31は石錘（-70cm）である。幅2~3mmの浅い溝が巡る。

2) 土坑 (SK008・SK009)

SK008 (第10図)

I区北側で検出した。長さ115cm、幅62cm、深さ43cmの隅丸長方形の土坑である。壁はほぼ垂直に掘り込んでおり、断面はU字状を呈する。床面は平坦である。埋土は、黒褐色粘質土と黄褐色ロームブロックが混じったものである。

出土遺物 (第10図)

32は甕の口縁部から胴部である。33・34は甕の口縁部である。35は甕の底部である。36は花崗岩製の敲石である。遺構の床面に斜めに刺さったような状態で出土した。敲打面のほかに、表裏面とも擦痕が見られ、平坦面になっている。磨石としても使用された可能性が考えられる。重さは2350gを量る。37は砂岩製の磨石である。重さは230gを量る。

SK009 (第10図)

I区東側で検出した。幅109cm、深さ56cmの長楕円形を呈する。東端は調査区範囲から外れていたので、全体の長さは不明であるが、検出した長さは280cmである。断面は逆台形で、埋土は、灰褐色の粘質土に黄褐色のロームブロックが混じったものである。

出土遺物 (第10図)

38~40は須恵器である。すべてロクロ回転は時計回りである。それぞれヘラ記号が刻まれている。38は壺身である。39は甕である。頸部には沈線文を、胴部外面に板小口押圧による列点文と沈線文を施す。40は長頸甕である。胴部上半に沈線文を施す。41は器台である。内外面とも明黄褐色を呈する。上面は平坦で、外面をヘラ条の工具で調整している。

その他の土坑出土遺物 (第11図)

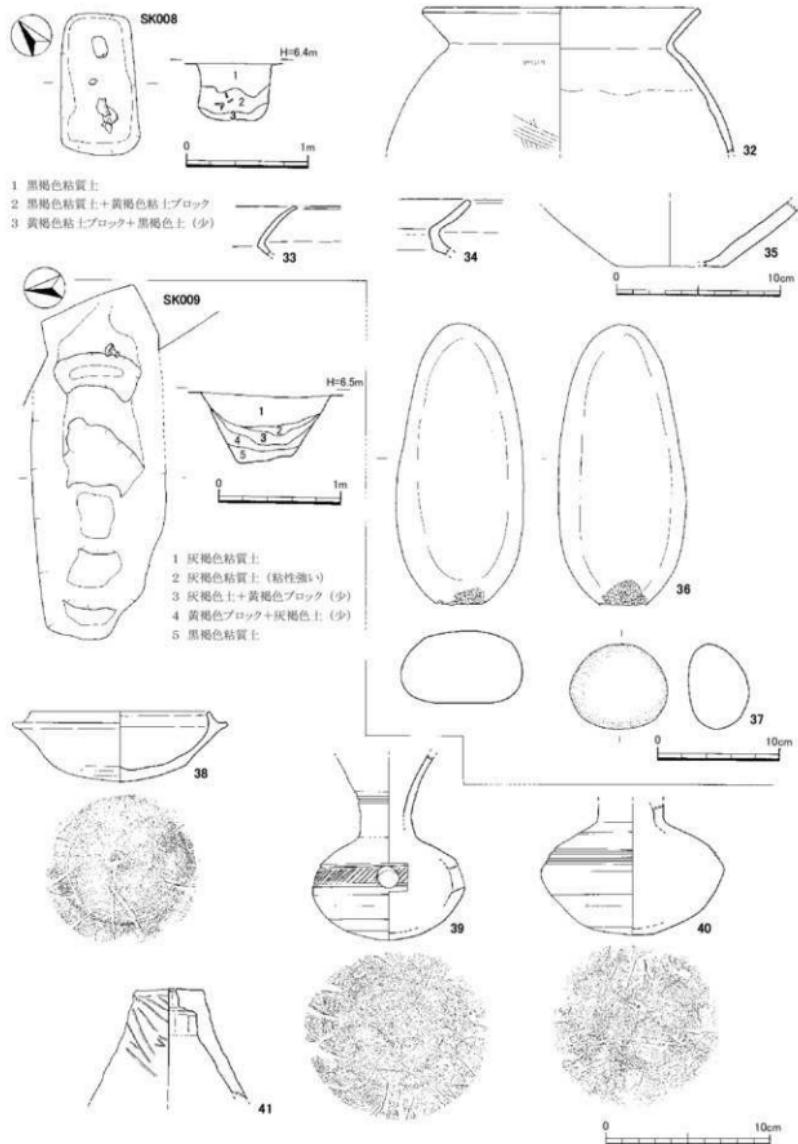
42~45は、SK007出土の遺物である。42は土師器壺の取手部分である。43は須恵器の高台付壺である。44は須恵器の蓋である。45は円筒埴輪の突帶部を含む胴部破片である。胎土は橙色を呈し、径1mm程度の白色粒を多く含む。内外面ともに磨耗しており、調整の跡は見て取れない。46は須恵器の蓋である。

3) 溝 (SD003~006 第11図)

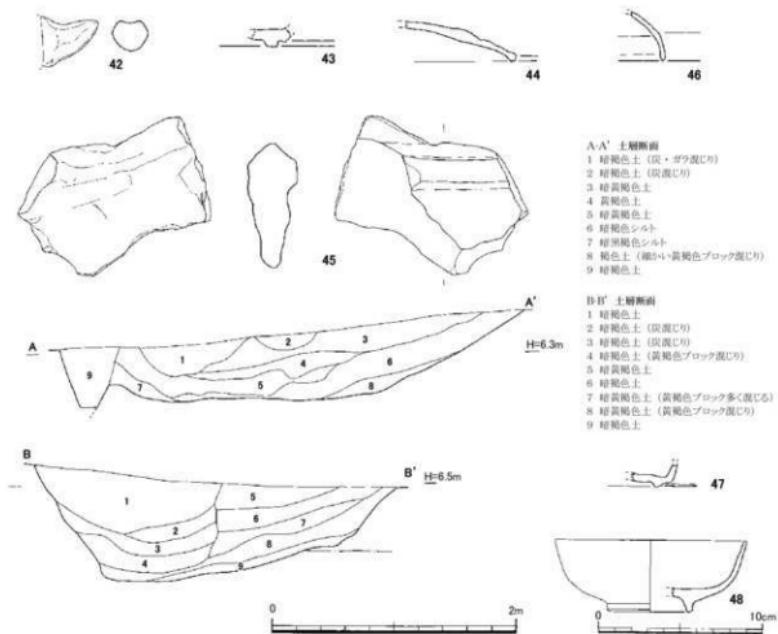
調査区西側から南側で数条の溝が切りあい、検出された。溝は土坑とも切り合っており、切り合いで古い順にSK007→SD006→SD005→SD004→SD003→SK001・002である。SD006は、調査区南西隅で東方向に矩形に曲がる。

出土遺物 (第11図)

47は須恵器の高台付壺である。48は陶器の碗である。緑色の釉調で、内面は蛇の目釉剥ぎである。何条もの溝が掘り返され、切り合っており、溝内からの出土遺物は少なくいずれも小片であるが、古墳時代から近世の遺物が、遺構の上層、下層関係なく混ざって出土する状況であった。



第10図 SK008・009実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3, 1/4)



第11図 SD土層断面実測図 (1/40) およびSD・SK出土遺物実測図 (1/3)

3. 結語

今回の調査では、弥生時代後期の土坑、古墳時代前期の井戸、古墳時代後期の土坑、中世の溝等を確認することができた。それぞれの構造について、周辺の調査成果と併せて考えてみたい。

133次調査の北西側で行われた18次調査で検出されたV字形の溝は、逆茂木状柱痕や地形などから環濠の外濠の可能性が指摘されており、弥生時代後期から終末期に位置づけられている。本調査区は、那珂遺跡群の北側部分に分布する弥生時代後期から終末期の集落の一部であった可能性が考えられる。さらに、18次調査では古墳時代前期の堅穴住居、後期の建物跡も検出されており、133次調査区も18次調査の居住地域と関連すると推測される。

また、133次調査の南西側で行われた28次調査においては、15～16世紀の地下式土坑および東西方向の溝が検出されている。今回の調査で検出されたSD006は、その時期を明確に示す遺物の出土はないが、この溝と一部平行することなどから考えて同じく中世後半に掘られ、使用されていたものと考えたい。ただし、その性格に関しては、溝の内側に同時期と考えられる構造が確認されなかったことから、屋敷地を囲む溝という役割ではなく、排水の機能を果たしていたもの、もしくは土地境のような役割を想定したい。



1. I区調査区全景（南から）



2. II区調査区全景（西から）

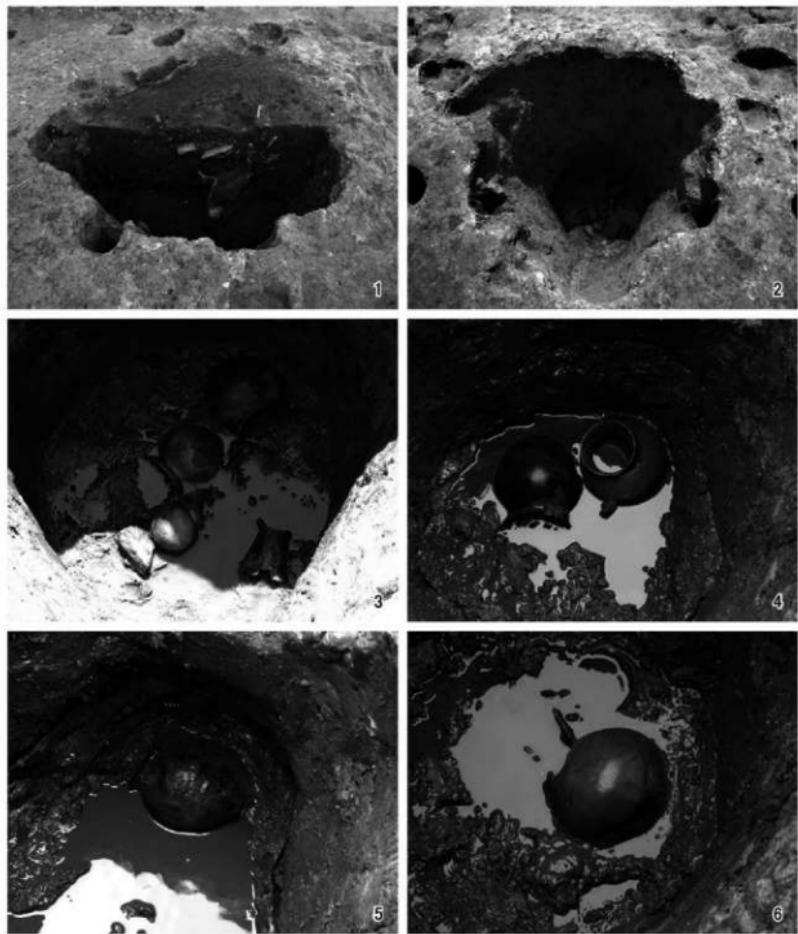


3. III区調査区全景（南から）

図版2



1. SK008 土層断面（西から） 2. SK008 完掘状況（西から）
3. SK009 土層断面（西から） 4. SK009 完掘状況（西から）
5. SD006 土層断面（南から） 6. SD006 完掘状況（東から）



1. SE011 土層断面（東から）
2. SE011 上面半截状況（東から）
3. SE011 上層土器出土状況（東から）
4・5・6. SE011 下層土器出土状況（東から）

図版4



1. SE011 出土遺物（上層）



2. SE011 出土遺物（下層）

報告書抄録

ふりがな	なか66							
書名	那珂66							
副書名	一那珂遺跡群第133次調査報告書一							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1193集							
編著者名	福薗美由紀							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2013年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
なかいせきぐん 那珂遺跡群	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 とうこうじまち。ちようめ 東光寺町1丁目 318、321、322、 323番 323番 323番 323番	40130	020085	33° 34' 29"	130° 25' 59"	20110705 ～ 20110920	540	共同住宅建設 記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
那珂遺跡群	集落	弥生・古墳・中世・ 近世	柱穴・土坑・溝・井戸	弥生土器・石器・土師器・ 須恵器・陶磁器	—			
要約	今回の調査では、弥生時代後期の土坑、古墳時代前期の井戸、後期の土坑、中世の溝等を検出した。井戸内からは古墳時代前期の一括資料を得ることができた。周辺の調査成果と併せて、集落の一部を形成していたと考えられる。また、調査区の西側から南側で検出された矩形に曲がる溝は、何度も掘り返しをして使用されており、中世から近世にかけての遺構であると考えられる。							

那珂66

—那珂遺跡群第133次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1193集

2013(平成25)年3月22日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

(092) 711-4667

印刷 会社名 國崎美峰堂

住所 福岡市東区箱崎1丁目20-5 〒812-0053

電話 092-641-8822